

高清水町文化財調査報告書第4集

高清水城跡・佐野遺跡

平成17年3月

高清水町教育委員会

序 文

高清水町は、狭いながら、豊かな自然に恵まれ、しかも先人の残してくれた数多くの文化遺産が眠っていると言われています。

そして、皆様すでにご承知のように、平成10年3月、文化財調査報告書第1集「高清水城跡」を皮切りに、12年3月第2集「経ヶ崎・觀音沢遺跡」、14年3月第3集「仰ヶ返り地蔵前遺跡・高清水城跡」が報告され、その都度、町の歴史が解明されてきました。

本書は、高清水町国民健康保険診療所改築に伴う「高清水城跡発掘調査」、東小路道路改良工事に伴う「高清水城跡発掘調査」、上佐野2～3号線道路改良工事に伴う「佐野遺跡発掘調査」などの報告書であります。そして、又新しく町の歴史が解き明かされ、積み重ねられました。

今、時は、片時も留まることなく、新しいものを求め日々めまぐるしく変ぼうし続けております。それは、今我々が生きている証であり、後世に残すべき貴重な歴史になることは間違ひありません。しかし、今があるのは、先人たちが築き上げた貴重な文化遺産・歴史に支えられてきたからであることを忘れてはならないのです。そして、私たちには、それをいかに保存し後世に伝えていくかという大きな責任があります。

これからも地道な努力により、さらなる町の歴史が掘り起こされ、解明されていくことを祈念したいと思います。

最後になりましたが、発掘調査・本報告書の発刊に当たり、多大なるご指導、ご尽力を頂きました宮城県文化財保護課の皆様方をはじめ、町当局・関係諸機関のご理解、ご支援に深甚なる感謝を申し上げ、発刊の挨拶に代えさせていただきます。

平成17年3月

高清水町教育委員会

教育長 渡邊全恵

目 次

Iはじめに.....	1
II高清水城跡.....	2
1高清水城跡の概要とこれまでの調査.....	2
2第5次調査.....	2
1)調査に至る経過と調査の方法.....	2
2)調査の成果.....	5
3)考察.....	6
4)まとめ.....	6
3第6次調査.....	7
1)調査に至る経過と調査の方法.....	7
2)調査の成果.....	7
3)考察.....	10
4)まとめ.....	10
III佐野遺跡.....	11
1調査に至る経過と調査の方法.....	11
2調査の成果.....	11
3まとめ.....	14
写真図版.....	15

例 言

1. 本書は宮城県栗原郡高清水町に所在する高清水城跡2地点、佐野遺跡2地点で行った発掘調査の報告書である。
2. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理、執筆は課員の協議を経てI・IIを大和幸生が、IIIを白崎恵介が行い、全体の編集は大和が行った。
3. 本書における土色の記述については、「新版標準土色帖(1970:小山・竹原)」を使用した。
4. 本書第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「高清水」「築館」「真坂」「荒谷」を複製して使用した。
5. 本書における遺構の略記号は次の通りである。
SA:柱列跡 SB:掘立柱建物跡 SD:溝跡 SE:井戸跡 SI:竪穴住居跡 SK:土壤
6. 本書における座標値は、日本測地系に基づいており、国家座標第X系による。
7. 高清水城跡の調査は、これまで数次にわたって行なわれてきた。今年度の調査は下記のように表記する。
第5次調査:診療所建設に伴う確認及び事前調査
第6次調査:町道東小路線拡幅に伴う事前調査
8. 調査の記録や整理に関する資料及び出土品は、高清水町教育委員会が一括して保管している。

調査要項

高清水城跡（第5～6次調査）

遺跡名：高清水城跡（宮城県遺跡登録番号44024）

遺跡記号：TA

所在地：宮城県栗原郡高清水町字東館ほか

調査原因

第5次調査：国民健康保険高清水診療所建設及び駐車場・歩道建設に伴う確認・事前調査

第6次調査：町道東小路線拡幅工事に伴う事前調査

調査主体：高清水町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査面積：第5次調査 約400m²

第6次調査 約250m²

調査期間：第5次調査 平成16年6月7日～11日

第6次調査 平成16年8月23日～30日

調査員：第5次調査

櫻田逸子（高清水町 町史編纂事務局）

後藤秀一・佐藤則之・須田良平・大和幸生（宮城県教育庁文化財保護課）

第6次調査

櫻田逸子（高清水町 町史編纂事務局）

後藤秀一・佐藤則之・菊地逸夫・大和幸生（宮城県教育庁文化財保護課）

佐野遺跡

遺跡名：佐野遺跡（宮城県遺跡登録番号44044）

遺跡記号：RC

所在地：宮城県栗原郡高清水町佐野丁ほか

調査原因：① 無線基地局鉄塔建設

② 町道改良

調査主体：高清水町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査面積：①調査 約180m²

②調査 約400m²

調査期間：①調査 平成16年9月29日

②調査 平成16年11月24日

調査員：①調査 佐藤則之・須田良平

②調査 村田晃一・白崎恵介

I はじめに

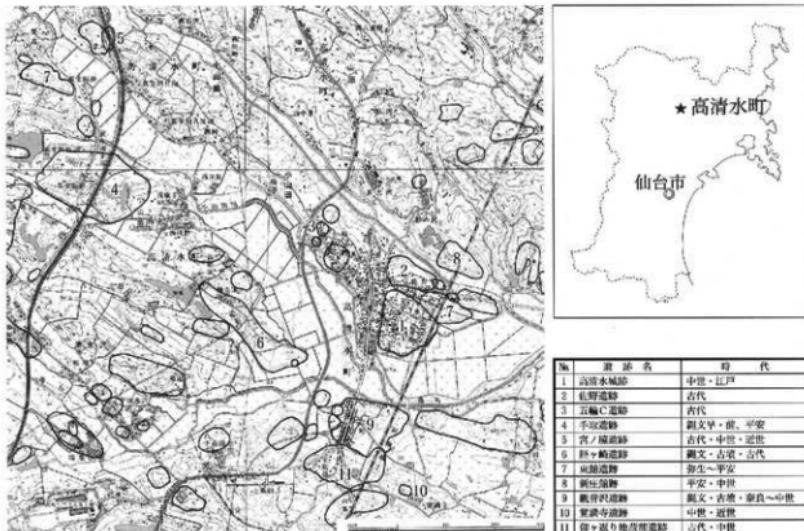
高清水城跡は宮城県北部の栗原郡高清水町に所在する中近世の遺跡で、佐野遺跡は同じく高清水町に所在する古代の遺跡である。町役場から、高清水城跡は南東に約600m、佐野遺跡は北東約650mにそれぞれ位置している。

高清水町は、奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵の末端部に位置している。高清水城跡と佐野遺跡は善光寺川と小山田川の間の丘陵末端部分、標高約20mの微高地上に立地している。

高清水町内には現在、40箇所ほど遺跡が登録されている。高清水城跡・佐野遺跡に関わる奈良・平安時代と中世の概要について述べる（第1図）。

奈良・平安時代の遺跡としては、経ヶ崎遺跡、東館遺跡、五輪C遺跡、手取遺跡、宮ノ脇遺跡などが知られている。経ヶ崎遺跡では奈良時代の大型の堅穴住居跡などが発見され（高清水町教委：1999）、東館遺跡では平安時代の遺物包含層が確認されており、近くに集落があることが想定されている（県教委：1980a）。

中世の遺跡としては、中世城館である新庄館跡が昭和49年に調査され、通路状造構や段状造構が発見された（県教委：1980b）。城館以外では、観音沢遺跡で鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての建物跡や堅穴状造構が発見され（県教委：1980c）、その近くでは中世寺院と想定される覚満寺遺跡があり、葬送の場であったことが確認されている（覚満寺跡発掘調査団：1999）。また、仰ヶ返り地蔵前遺跡では、中世「奥大道」と思われる道路跡や中世の瓦などが発見されている（高清水町教委：2002）。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 高清水城跡

1. 高清水城跡の概要とこれまでの調査

高清水城跡は、天文年間（1532～1554）に大崎氏一族の高木工権頭直堅が築城し、天正14年（1587）に城郭として更に整備を進めたといわれる。大崎氏滅亡後の天正18・19（1590・1591）年には大崎・葛西一揆において伊達政宗の陣所となった。慶長9（1604）年には高清水の地が伊達政宗から亘理重宗の隠居所として与えられ、その子宗根が居した。その後、仙台藩領高清水要害として、宝曆7（1757）年に宮崎から石母田興頼が配され、以後明治維新まで石母田氏が代々居住した。明治6（1873）年の学制施行に伴い石母田家から屋敷の一部が教場として提供され、城跡は高清水中学校の敷地の一部に、他は市街地になって現在に至っている。残存する遺構としては、居所（主郭）の北側に土塁数条と外堀を埋めて作った外濠公園があり、往時を偲ばせている。

昭和51（1976）年に東北新幹線建設工事に関わる発掘調査（第1次調査）が行なわれ、古墳時代から近世までの遺構や遺物が発見された。当初は、調査地点が高清水城跡の東部に位置する「東館遺跡」と近接・重複していたため「東館遺跡」として調査・報告がなされた。報告書では「堀2・3」は高清水城跡の北側を区画する外堀ではないかと記載されている（県教委：1980a）。

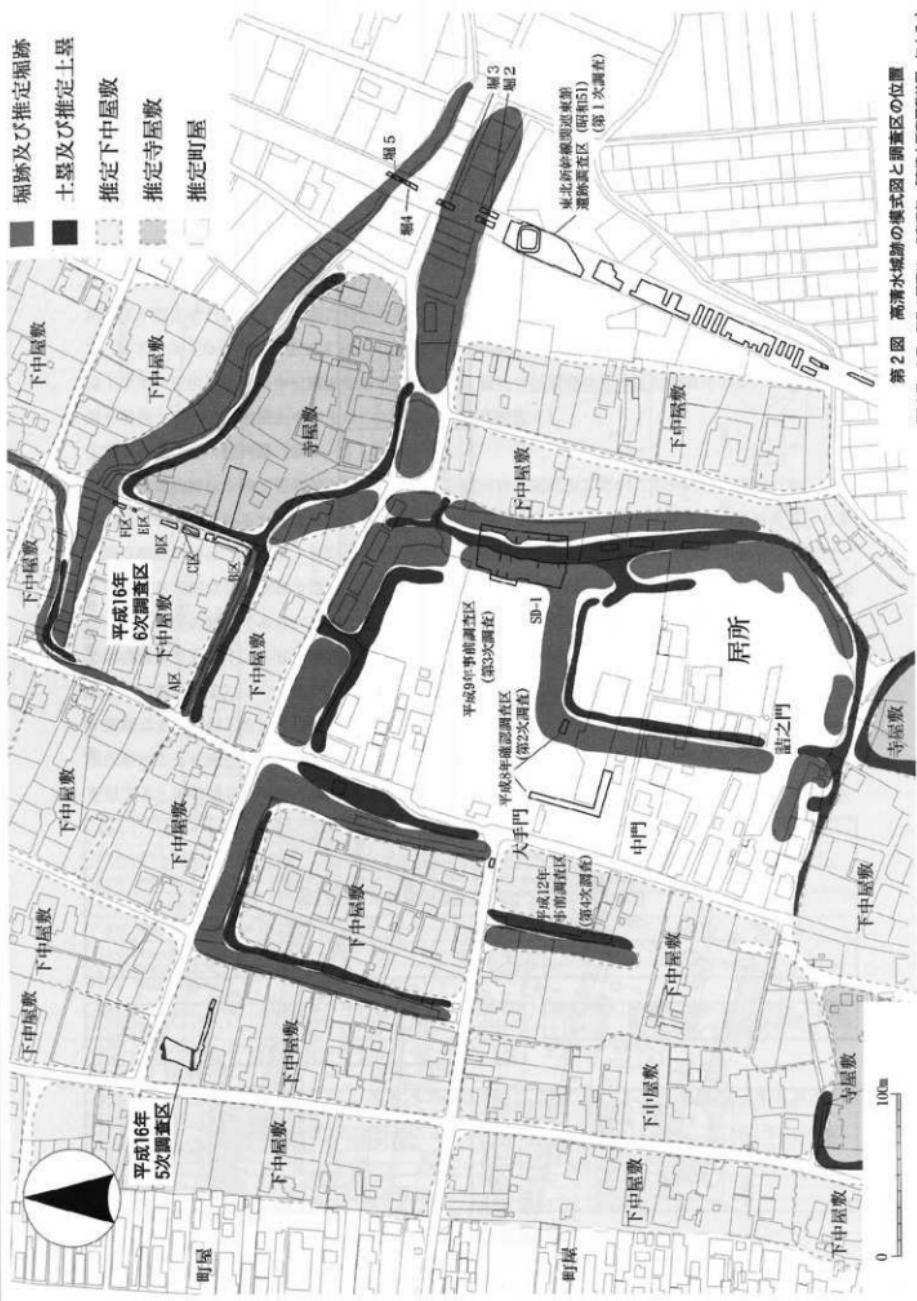
その後、平成8・9（1996・97）年には高清水中学校の体育館建設工事に関わる発掘調査がおこなわれた。平成8年の確認調査（第2次調査）では堀や主郭内部の掘立柱建物跡の一部などが確認され、平成9年の事前調査（第3次調査）では、中世の溝跡、井戸跡、土壙、柱穴が発見され、3時期の変遷を捉えた。この際検出された馬出遺構は、15世紀中葉以降と考えられ、中世の高清水城跡の一端を窺い知る貴重な資料になった。また、近世では主郭を二重の外堀が囲み、中でも、内側のSD-1は上幅14.5m、深さ3.2mときわめて大規模な堀であったことが明らかになった（高清水町教委：1998）。平成12年の下水道工事に伴う調査（第4次調査）では、近世高清水城跡の堀と堀を結ぶ給排水用の暗渠施設が確認されている（高清水町教委：2002）。

これまでの調査成果や貞享五年（1688）作の高清水要害屋敷絵図などから、居所を中心に北側には二重の堀と土塁が巡り、内側には「匂」字状の堀と土塁が取り付き、更に周囲には堀と土塁で区画した屋敷地を配している様子が想定されている（第2図）。

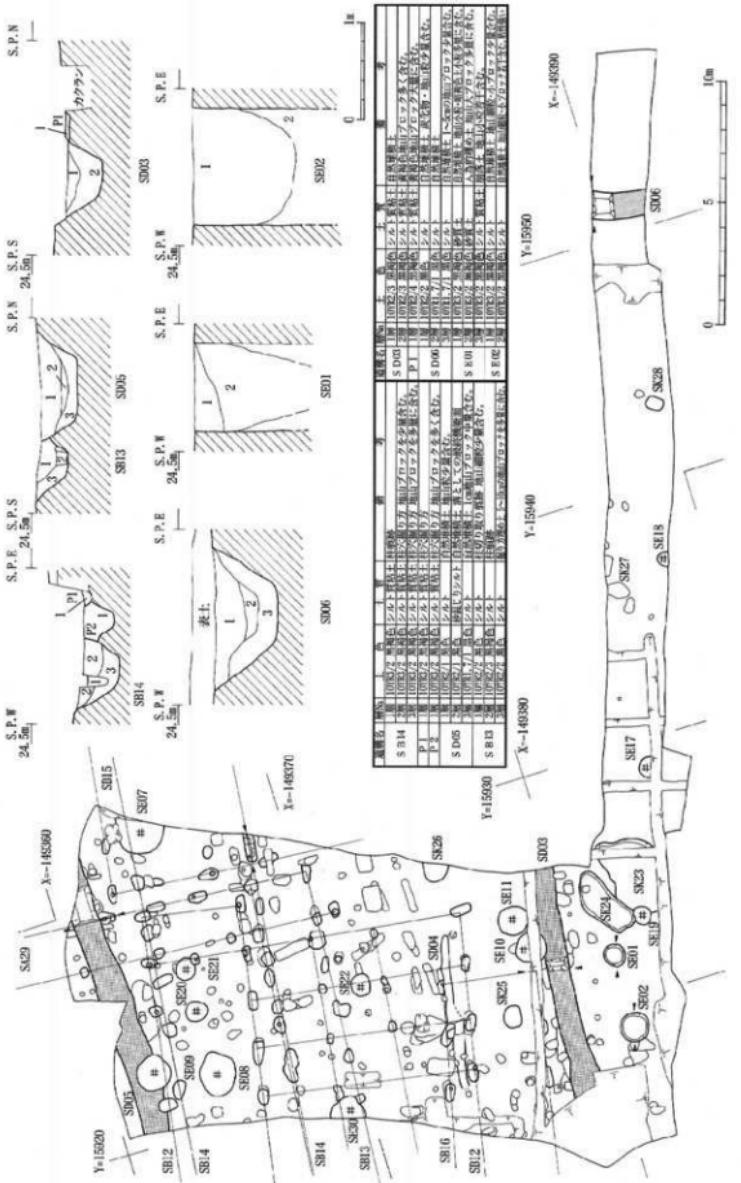
2. 第5次調査

1) 調査に至る経緯と調査の方法

平成16年4月に高清水城跡の外堀西側で国民健康保険高清水診療所の改築工事が行なわれ、現場において陶磁器・鉄製品や遺構が露出しているとの通報が町民より高清水町教育委員会にあった。町教育委員会からの通報を受けて宮城県文化財保護課が現地を確認したところ、診療所本体の改築は既に終了し、歩道及び駐車場予定地に陶磁器や遺構が露出している状況であった。そこで、高清水町、町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者が協議をし、工事の終了した診療所本体部分は調査不能なた



第2図 無清浄機の構式圖と調査反応位
(端定器・土壠・屋敷の配圖は、昭和五年「灌漑水質監査報告書」による)



第3圖 第5次調查 遺構配置

め、歩道及び駐車場予定地部分の確認調査を実施することにした。また、調査区南側が工事施工時に削平されることから、南側部分を事前調査に切り替え、調査を行なった。発見された遺構及び調査区については、国家座標第X系を用い、平面直角座標を組み、縮尺1/20・1/50の平面図・断面図を作成した。また、遺構の記録写真は35mm白黒・カラースライド・デジタルカメラで撮影した。

2) 調査の成果

今回の調査では掘立柱建物跡 5 棟以上、柱列跡 1 列、溝跡 4 条、井戸跡などを検出した(第3図)。調査区が限定され、また、確認調査のため遺構の新旧関係や規模などの詳細は明確ではない。したがって、以下では主な遺構のみ記述する。その他の遺構の概要は一覧表にまとめた(表1-1~4)。遺物は工事中に近世陶磁器や中世陶器などが採集され、調査では遺構に伴う近世陶磁器の他、少量の上師器や石鎚なども遺構堆積土や表土から出土した(写真図版4)。

①据立柱建物跡・柱列跡（表1-1）

掘立柱建物跡は5棟、柱列跡1列を検出した。柱穴は多数検出したが、部分的な調査のため、建物の全体が判明しているものはない。建物の重複状況から少なくとも4時期の変遷が考えられる。S B 12掘立柱建物跡は3間以上・5間の大型の建物で、東に張り出し部が付き、一部に床束を持つ建物である。S B 13掘立柱建物跡は南に1間分の庇若しくは縁が取り付く桁行4間以上・梁行3間以上の東西方向の大型の建物である。また、これらの建物は、S D 05溝跡と重複し、S B 13掘立柱建物跡はS D 05溝跡よりも古く、S B 12掘立柱建物跡はS D 05溝跡よりも新しい。

②灌跡 (表 1-2)

溝跡は4条検出した。S D05・06溝跡は、上幅が106~146cm、底面幅が60~65cm、深さが37~64cm、断面形がともに逆台形を呈する。S D03は上幅が88cm、底面幅が35cm、深さが48cm、断面形は逆台形を呈する。遺物はS D04から19世紀後半頃の染付磁器が出土している。

造物名	施 物 造 造	断面寸法(単位:m)		柱脚跡	備 考	重 量 体 紹
		横幅	高さ			
S H12	桁行 3間以上×梁行 5間	3.0間×高さ (2.2)-(2.4)-(1.9)	高さ	東	裏面に 1間分張り出し、面側に床席、S E21-S D65-S H12	19~30cs
S B13	桁行 4間以上×梁行 3間以上	4.8間×高さ (2.1)-(1.8)-(1.9)-(2.0)	高さ	東	裏面に 1間×5間以上の壁(?)底、S H13-S D65	15~26cs
S B14	脇行 4間以上×梁行 1間	1.4間×高さ (4.7)	高さ	北	20cm	
S B15	桁行 2間以上×梁行 3間以降	2.4間×高さ (2.0)-(2.3)-(2.4)	高さ	北	20cs	
S A26	3間以上以降	高さ (2.4)-(3.0)-(3.1)	高さ	西	10~16cs	26cs

表1-1 阿立杜德物性数据

地盤名	形態	下限	上限	地盤形態	方向	地盤面積
S-D03 [1] 11.5m	85cm	95cm	40cm	断面形	東西	—
S-D04 [6.3m]	90cm	95cm	15cm	断面形	東西	—
S-D05 [11.5m]	10cm	11.5m	—	断面形	南北	—
S-D06 [2.1m]	146cm	95cm	64cm	断面形	南北	S E03 → S-E06

地盤名	形態	下限	上限	地盤形態	方向	地盤面積
S-E01	河岸	—	90cm	兩側	2m±0.5	砂質細砾土
S-E02	河岸	—	130cm	兩側	2m±0.5	砂質細砾土
S-E03	河岸	—	130cm	右側	2m±0.5	砂質細砾土

表1-2 满洲·区西病脉属性表

地名	字名	平地	山地	河床	洼地	高地	丘陵	盆地	冲积平原
S.E.07	内侧凹	高岸20cm			S.H.21	海内凹	海内凹20cm	海内凹20cm	S.K.21→S.H.21
S.E.08	不偏里	海面10cm	海面50cm		S.E.22	海内凹	海内凹20cm	海内凹20cm	
S.E.09	不偏里	海面15cm	海面35cm	S.D.07→S.E.09	S.D.05	海内凹	海内凹20cm	海内凹20cm	S.K.22→S.E.19→S.K.24
S.E.10	不偏里	海面14cm	海面34cm	S.D.06→S.E.10	S.K.24	海内凹20cm	海内凹20cm	海内凹20cm	S.K.23→S.E.19→S.K.24
S.E.11	内侧	海面20cm			S.K.25	不偏里外	不偏里外20cm	不偏里外20cm	
S.E.12	内侧	海面90cm			S.K.26	外分明	海内凹20cm↓→100cm	海内凹20cm↓→100cm	
S.E.13	内侧	海面50cm			S.K.27	海内凹	海内凹20cm↑→100cm	海内凹20cm↑→100cm	
S.E.14	内侧	海面5cm		S.K.23→S.E.14	S.K.28	海内凹	海内凹20cm	海内凹20cm	
S.E.15	内侧	海面25cm	海面35cm		S.E.20	内侧凹	海内凹20cm	海内凹20cm	

表1-1 その他の土壤・井戸調査結果

第1表 5次調査 遺構属性表

③井戸跡（表1-3）

井戸跡は14基確認した。事前調査の対象となったS E01・02井戸跡は調査区南側に位置し、ともに平面形は円形を呈し、S E01井戸跡は直径90cm、S E02井戸跡は直径120cmである。壁はともに垂直に立ち上がり、断面形は筒状を呈する。また、いずれも湧水のため、完掘できなかつたが、ボーリング調査により1m以上深いことが明らかになっており、深さは2m以上になると考えられる。S E01井戸跡の堆積土は、2層が人為的埋土、他は黒褐色の自然堆積土である。S E02井戸跡の堆積土は、黒褐色の自然堆積土である。また、S E01井戸跡の堆積土から17世紀代の染付磁器が出土している。

3) 考察

S D03・05・06溝跡はいずれも断面形が逆台形を呈し、堆積土が類似している。高清水城跡の西側外堀北辺若しくは西辺にはほぼ平行する。S D03・05は18mの間隔で東西方向に平行する。このようなことから、これら溝跡は遺物は出土していないものの、絵図に記された高清水城跡の外堀西側に位置する「下中屋敷」の区画溝跡と考えられる。絵図では「下中屋敷」は大きく道路で区画されて描かれているのみで区画内の詳細は描かれていない。S D03・05溝跡の間隔は10間（18m）であり、屋敷地の地割りを反映している可能性がある。したがって、「下中屋敷」内に更に細かな地割りが想定されるが全体像は不明である。

掘立柱建物跡は調査区西側で4時期以上の変遷を辿るが、調査区は狭いものの南西側と東側では掘立柱建物跡はほとんどみられない。近世武家屋敷地はこれまでの調査例から、表の道路若しくは表門に比較的近い地域に主屋が建てられ、その裏手に納屋や井戸を設ける空間が存在するという配置が考えられており（佐藤：1974・1994・迫町教育委員会：1995）、西側の建物が重複する地区は表門や表道路に近接する場、東側は裏手付近の空間、南西側は屋敷境にあたる可能性が考えられる。なお、区画溝跡は、建物跡と重複することから、何度かの屋敷地の変遷が考えられるが、部分的な調査のため詳細は不明である。

4) まとめ

- ① 今回の調査区は高清水城跡の外堀西側に位置する。発見された遺構は、掘立柱建物跡5棟以上、柱列跡1列、溝跡4条、井戸跡、土壙などを検出した。
- ② 遺物は井戸、溝跡、柱穴から近世陶磁器が出土した。石鎚、上師器、常滑産の中世陶器などが表上から採集されているが、明確な縄文時代・古代・中世の遺構は確認できなかつた。
- ③ 今回検出した掘立柱建物跡や溝跡などは高清水城跡存続期のものと考えられる。
- ④ 高清水城跡の外堀西側の位置に、屋敷地を10間幅で東西に区画した地割りを検出した。17世紀後半の絵図に記された「下中屋敷」内に更に細かな屋敷地の地割りが想定された。
- ⑤ 掘立柱建物跡は調査区西側で少なくとも4時期の変遷を辿り、表に近接する場が想定され、東側は裏手の空間、南西側は屋敷境にあたる可能性が考えられる。

3 第6次調査

1) 調査に至る経過と調査の方法

平成16年3月に高清水城跡地内において町道東小路線の改良工事が計画されたため、高清水町建設課、町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者が協議を行ない、①予定地南側に位置する土壙に影響を及ぼさない工事を実施すること、②生活道路として使用している現道部分は除いて、拡幅部分について事前調査を実施することの2点を確認し、調査を行った。発見された遺構及び調査区は道路センター杭を基準として縮尺1/20・1/50の平面図・断面図を作成した。また、遺跡の記録写真は35mm白黒・カラースライド・デジタルカメラで撮影した。

2) 調査の成果

今回の調査で発見された遺構は、柱列跡1列、溝跡4条、土壙7基、井戸跡1基などである。遺構などから上飾器、陶磁器類、占銭など少量の遺物が出土した(第4・5図、写真図版4)。

①柱列跡(表2-1)

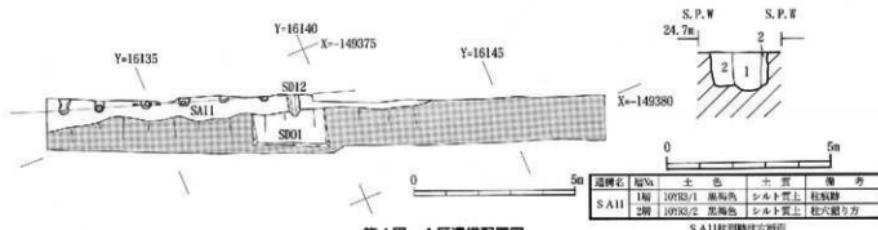
S A11柱列跡

A区 S D01溝跡の北側に沿う東西方向の柱列跡である。規模は5間以上で調査区内では6.1mを確認した。柱間寸法は西から1.1・1.5・1.1・1.2・1.2mである。柱穴は全体形がわかるものはないが、深さは13~25cmであり、柱痕跡は直径13~23cmの円形で、深さは20cmほどである。

②溝跡(表2-2)

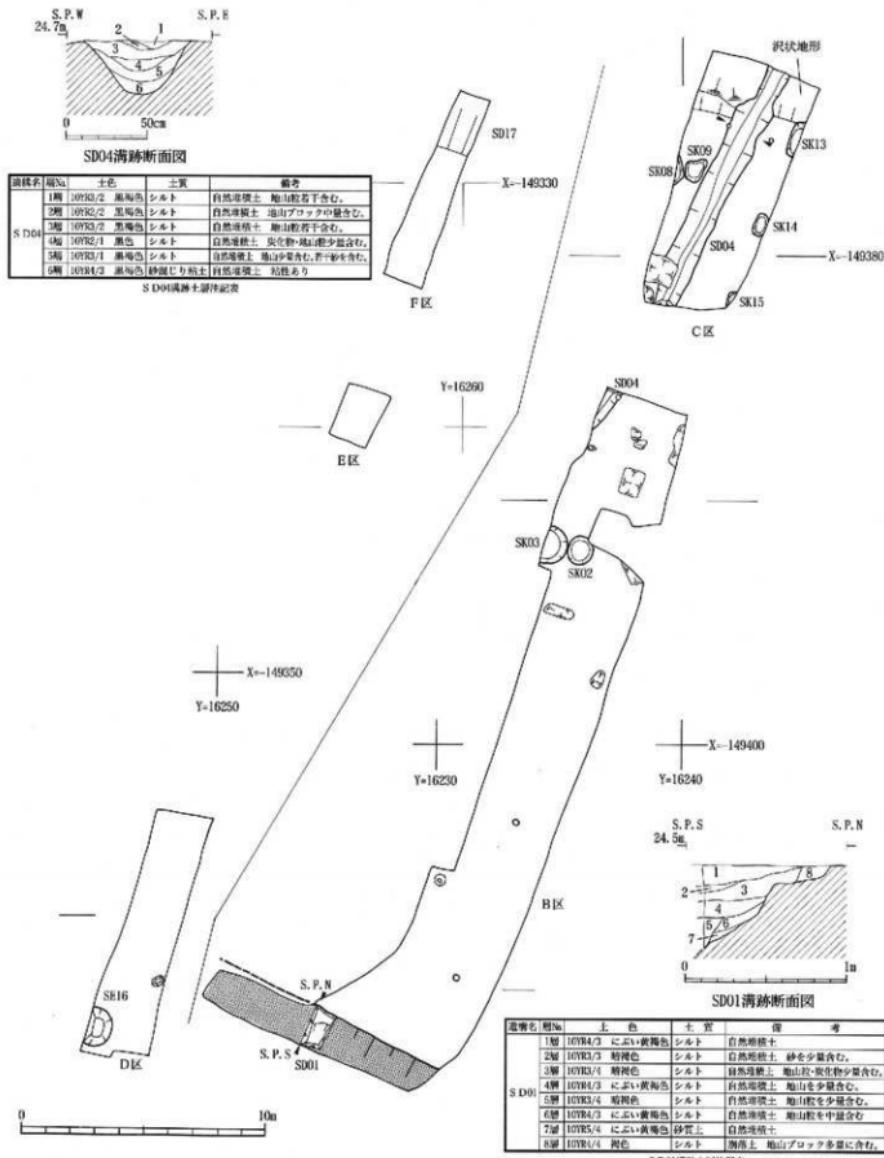
S D01溝跡

A区とB区で検出した東西方向の溝跡で、調査区外の南に残存している土壙に平行して位置する。A区・B区とともに現道が接しているため部分的にしか掘り下げることができなかった。A区で3時期以上の変遷が認められる。A区で11.8m、B区で10mを検出し、総長は106m以上と考えられる。規模は上幅が120cm以上で、深さ50cm以上で断面形は不明であるが、北側に段が取り付く。堆積土は、1~7層はいずれも暗褐色の自然堆積土で、8層は地山ブロック混じりの崩落土である。堆積土上面から近世陶磁器が出土している。



第4図 A区遺構配置図

S A11柱列跡柱穴断面



第5図 B・C・D・E・F区 連携配置図

S D04溝跡

B区とC区で検出した南北方向の溝跡である。溝跡は南西に徐々に方向を堆積土は黒～黒褐色の自然堆積土である。転じながらB区で1.9m以上、C区で10.6m以上検出し、総長は16.6m以上である。規模は幅1.3m、深さ75cmであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒～黒褐色の自然堆積土である。堆積土中から南宋銭(景定元寶：初鑄1260年)が出土している(第6図)。



S=1/1

第6図 古銭

S D12溝跡

A区で検出した南北方向の溝跡である。S D01溝跡に取り付き、総長は70cm以上である。規模は幅60cm、深さ10～18cmで、S D01溝跡に向かうに従って深くなる。堆積土は暗褐色の自然堆積土である。遺物は出土していない。

S D17溝跡

F区北端で東西方向に延びる溝跡を部分的に検出した。調査区が狭く、現道が崩落する可能性があつたため調査を断念した。堆積土は黒褐色の自然堆積土である。遺物は出土していない。

③土壤・井戸跡(表2-3)

検出された土壤は3つのタイプに分類され、①円形を基調とするもの(S K02・03土壤)、②方形を基調とし、断面形が皿状のもの(S K8・9土壤)、③方形を基調とし、断面形がU字形を呈するもの(S K13・14・15土壤)に分かれる。

なお、③の土壤の堆積土はすべて人為的埋土である。規則的に土壤が並ぶことから柱穴の可能性も考えられたが、柱痕跡は見つからなかつた。

S E16井戸跡

D区で検出した。直径150cmの円形を呈するものとみられ、1/3は調査区外へ広がる。湧水と崩落のため調査を断念したが、深さは170cm以上、断面形は漏斗状を呈する。遺物は出土していない。

遺構名	柱		穴		特徴	方向	遺物
	長	幅	平面形	平面寸法(cm)			
S A11	6.1m以上	柱間寸法(m)	不規	25~45	13~25	堆山ブロックを多く含む黒褐色土	13~23 東西 なし

表2-1 住居跡属性表

遺構名	調査区	長	幅	深	断面形	方向	重復回数	遺物	備考
S D01	A・B区	100m以上	120cm以上	1m以上	不明	北側に段	東西	S D12との関係は不明	近世陶磁器
S D04	B・C区	16.6m以上	1.3m	75cm	逆台形	南北	なし		吉窯 景定元寶(南宋 1260)
S D12	A区	0.6m以上	60cm	10~18cm	U字形	南北	S D01との関係は不明	なし	
S D17	F区	1.5m以上	不規	不明	不明・北側に段	東西	なし	なし	東部道路(図4-5)か

表2-2 溝跡属性表

遺構名	調査区	平面形	平面寸法	断面形	深	遺物	堆積土
S K02	B区	不整な円形	長軸120cm・短軸100cm	逆台形	20cm	人為	
S K03	B区	円形	直径60cm	逆台形	50cm	人為	
S K08	C区	方形か	長軸150cm・短軸40cm以上	皿状	10cm	自然堆積	
S K09	C区	不整な方形	長軸100cm・短軸75cm	皿状	10cm	自然堆積	
S K13	C区	調丸方形	長軸150cm・短軸80cm以上	U字形	30cm	近世陶磁器 人為	
S K14	C区	調丸方形	長軸100cm・短軸55cm	U字形	30cm	人為	
S K15	C区	調丸方形	長軸70cm・短軸50cm以上	U字形	25cm	人為	
S E16	D区	円形	直径150cm	漏斗状	170cm以上	自然堆積	

表2-3 土壌・井戸跡属性表

第2表 6次調査 遺構属性表

3) 考察

S D01溝跡は高清水城跡の推定される二重の外堀の北側に位置している。S D01溝跡の南に平行して高さ2~3m、下幅で5~10m、総長80mほど土塁が残存しており、土塁との直接的な関係は不明だが、位置的にみて、上塁の北側に取り付く区画の「堀」ではないかと考えられ、絵図の「下中屋敷」を区画する溝跡と考えられる。前述の絵図には、上塁は記載されているが、溝は記載されていない。このことから絵図面作成時の17世紀後半頃には堀として機能していなかった可能性が考えられる。S D04溝跡は南宋錢が出土しているだけであるが、S D01溝跡と方向性も若干異なることから、ここでは中世~近世の溝跡と考えた。また、S D17溝跡は溝の南端を検出しただけであるが、現地形は沢状地形に水田が広がり、貞享の絵図ではこの沢地の南側に土塁が廻っていることが記されている。また、東館遺跡調査時の「堀4」若しくは「堀5」の延長線上にあることなどから、S D17溝跡は高清水城跡北側を区画する堀跡である可能性が考えられる。

4)まとめ

- ① 今回の調査区は高清水城跡の外堀北側に位置する。発見された遺構は、柱列跡1列、溝跡4条、井戸跡1基、土壇などである。
- ② 遺物は、遺構から近世陶磁器や古錢などが出土した。
- ③ 今回検出した遺構は、S D04溝跡は中世から近世、その他の遺構は近世と考えられる。
- ④ 今回の調査区は、17世紀後半に作られた絵図に記された「下中屋敷」の縁辺部に相当する。屋敷地を区画していたと考えられる土塁に平行してS D01溝跡やS A11柱列跡などを検出し、「下中屋敷」の区画の一端を窺い知ることができた。また、「下中屋敷」の縁辺部であるため建物などは検出できなかつた。
- ⑤ 今回F区でS D17溝跡を検出し、この溝跡は高清水城跡の北側を区画する堀である可能性がある。

引用参考文献

- 覚満寺発掘調査団：1999「覚満寺発掘調査概報」宮城考古学第1号 宮城県考古学会
佐藤 巧：1974「近世武士住宅」叢文社
佐藤 巧：1994「旧小間家住宅修理工事報告」白石市
高清水町教育委員会：1998「高清水城跡」高清水町文化財調査報告書第1集
高清水町教育委員会：1999「絆ヶ崎遺跡・親音沢遺跡」高清水町文化財調査報告書第2集
高清水町教育委員会：2002「印ヶ返り地蔵前遺跡・高清水城跡」高清水町文化財調査報告書第3集
高清水町史編纂委員会：1976「高清水町史」
都立学校遺跡調査会：1990 白鶲
永井久美男：1994「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会
追町教育委員会：1995「佐沼城跡」追町文化財調査報告書 第2集
藤沼邦彦他：1981 日本城郭人系3 山形・宮城・福島 新人物往来社
宮城県教育委員会：1980 a「東館遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第65集
宮城県教育委員会：1980 b「新庄館跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書III 宮城県文化財調査報告書第65集
宮城県教育委員会：1980 c「根音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書IV 宮城県文化財調査報告書第72集

III 佐野遺跡

1 調査に至る経過と調査方法

平成16年9月7日に、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東北より無線基地局の鉄塔建設の計画が提示された。計画対象地は佐野遺跡の範囲に含まれており、関係者間で協議した結果、確認調査を実施することになった。これを受け平成16年9月29日に鉄塔建設計画地を対象として確認調査を実施した。鉄塔及び管理棟の建設を計画していた南北約16m、東西約10mの平面凸形の範囲を調査区として表土を20~30cm掘り下げたところ、調査区北東部の黄褐色砂質シルトの地山面で竪穴住居跡を検出した。そこで調査区を南側へ約6m拡張して、遺構の有無の確認を行ったところ、拡張箇所では遺構は検出されなかった。その結果、鉄塔の建設は遺構が存在しない南方へ位置を変更することになった。検出された遺構の記録として縮尺300分の1の略測図を作成し、デジタルカメラによる写真撮影を行った。

平成16年4月21日には、高清水町より町道改良の計画が提示された。現在幅員2~3mの砂利敷き道路を、幅員約6mに拡幅してアスファルト舗装しようとするものである。この計画の対象地も佐野遺跡の範囲に含まれており、前述の確認調査において、古代の竪穴住居跡が検出されていることや、計画地に隣接する箇所で竪穴住居跡の断面が確認できることから、拡幅部を対象に確認調査を実施することとなり、平成16年11月24日から調査を開始した。現在の道路には水道管が埋設されているため、これを避けて、田畠となっている道路拡幅部に調査区を設定した。

調査区は対象地内の7地点に、幅1.8mのトレンチを設定して遺構の確認作業を行った。その結果、溝跡を数条とビットを数個検出したが、これらの年代は特定できなかった。検出した遺構の記録として縮尺1/100の略測図を作成し、デジタルカメラによる写真撮影を行い、11月26日に調査を終了した。

以下、平成16年9月の鉄塔建設に伴う確認調査区を東区、平成16年11月の町道改良に伴う確認調査区を西区として、その成果を報告する。

2 調査の成果

①基本層序

佐野遺跡の基本層序は3層に大別でき、第I層が暗褐色シルトの表土・耕作土、第II層が黒褐色粘土質シルトもしくは黒褐色シルトの旧表土、第III層は黄褐色砂質シルトのいわゆる地山である。東区では調査区北部は第I層直下が第III層の地山面、調査区南部は第I層、漸移層、第III層という層序である。西区のトレンチ1~3では第I層直下が第III層、トレンチ4~7では第I~III層の層序で、場所によって第II層と第III層の間に、漸移層がみられるところもある。遺構はすべて第III層上面で確認した。

②発見された遺構と遺物

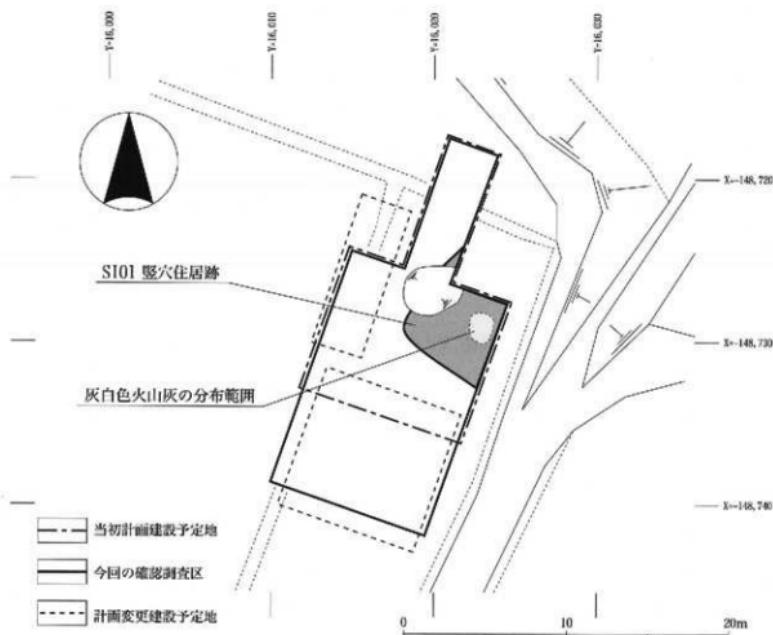
(1) 東区(第7図)

東区では、調査区の北東部の第III層上面で、S101竪穴住居跡を検出した。これは竪穴住居跡の南

辺から西辺にかけて確認したものである。住居跡の北辺と東辺は調査区の外にあるため全体の規模は不明であるが、一辺6m以上で、平面形は方形であると思われる。住居内の堆積土は暗褐色シルトであり、堆積土中に1.5~2mほどの範囲で灰白色火山灰層が分布していた。今回の調査は平面確認にとどめており詳細な住居跡の構造は不明である。なお、遺構確認作業中に土師器壺・甕の破片が数点出土した。

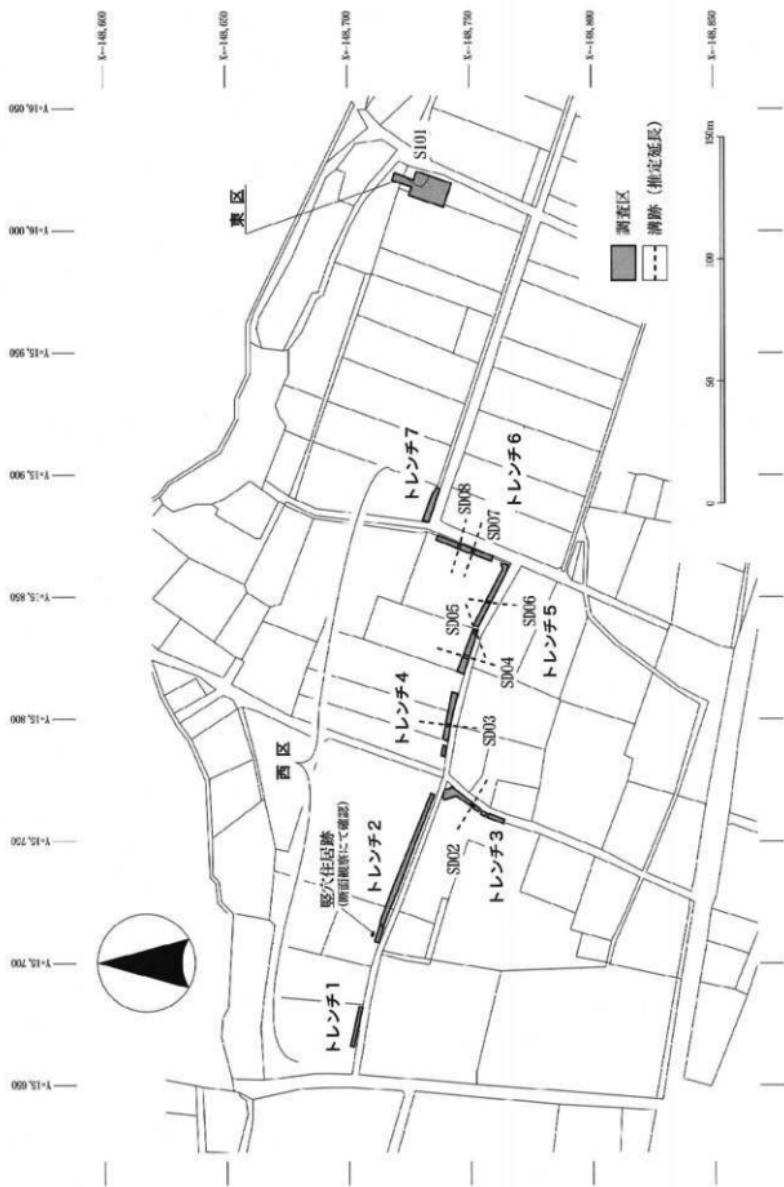
(2) 西区（第8図）

西区ではトレントを7箇所に設定した。以下、西から順にトレント1、2…7とする。トレント2でピット数個を、トレント3、4で溝跡2条を、トレント5で溝跡3条とピット数個を検出した（第3表）。トレント1、7では遺構は確認できなかった。なお、トレント2の北側では以前から堅穴住居跡の存在が知られていたが、今回の調査ではそれに関連するような遺構は検出できなかった。



第7図 佐野遺跡東区平面図(1/300)

第8図 佐野測量調査区位置図 (1/2,000)



溝跡は7条検出した(第4表)。いずれも幅50cm~1mほどのものであり、その方向はトレントごとに、南北方向のもの3条と、東西方向のもの4条とに分かれる(第8図)。溝の堆積土は第III層のブロックを含むしまりのない黒褐色シルトである。溝の深さは、トレント4のSD03溝跡で約30cm、トレント6のSD07溝跡が約6cm、SD08溝跡が約60cmであった。

トレント5では約2.7mの間隔で一直線上に4個並ぶビットを確認した。掘方は一辺約30cmの方形で、埋土はしまりのない黒褐色シルトである。柱痕跡は確認できなかった。

その他トレント2、5で検出したビットは直径20~30cm程度の円形のもので、ビット相互の配置に規則性は見出せなかった。

遺物はトレント6の第II層から須恵器壺の小破片が1点出土した。

トレント名	トレントの規模		検出した遺構
	長さ ^{※1}	深さ ^{※2}	
トレント1	17m	20~30cm	なし
トレント2	65m	50~60cm	ビット数個
トレント3	29m	50~80cm	SD02溝跡
トレント4	26m	80cm	SD03溝跡
トレント5	48m	40~60cm	SD04、05、06溝跡、ビット4個
トレント6	24m	75cm	SD07、08溝跡
トレント7	15m	45cm	なし

※1 トレントの幅は約1.8m ※2 現地表面から第III層上面まで

第3表 西区 トレント一覧

遺構名	検出トレント	内容
SD02溝跡	トレント3	東西南向、幅60cm
SD03溝跡	トレント4	南北方向、幅90cm、深さ30cm、堆積土：黒褐色シルト
SD04溝跡	トレント5	南北方向、幅1.2m、深さ35cm、堆積土：黒褐色シルト
SD05溝跡	トレント5	北東~南北方向、幅90cm、堆積土：黒褐色シルト
SD06溝跡	トレント5	南北方向、幅50cm、堆積土：黒褐色シルト
SD07溝跡	トレント6	東西方向、幅70cm、堆積土：黒褐色シルト
SD08溝跡	トレント6	東西方向、幅1.0m、深さ55cm 堆積土：黒褐色シルト

第4表 西区 検出した溝跡一覧

3まとめ

東区ではS101堅穴住居跡を検出した。住居内に堆積していた灰白色火山灰が10世紀前葉に降下した十和田火山のもの(宮城県多賀城跡調査研究所:2001)とみられること、遺構検出時に出土した土器器壺の破片は奈良時代後半頃のものと思われることなどから、この堅穴住居跡は古代のものと考えられる。

西区では、第II層から須恵器壺の小破片が出土していることから、この旧表土が古代以降のものであると考えられるが、年代を特定するには決め手に欠ける。また、検出した溝跡、ビットはいずれも堆積土が第II層起源のしまりのない黒褐色シルトであるが、遺物が出土しておらず、各遺構の年代を想定するには至らなかった。

参考文献

宮城県多賀城跡調査研究所2001:「多賀城跡 多賀城跡調査研究所年報2000」p.87の註5

写 真 図 版

写真図版 1 (高清水城跡 5次)



1 高清水城跡 5次調査
調査区（南から）



2 高清水城跡 5次調査
調査区（北から）



3 高清水城跡 5次調査
調査区東側（西から）

写真図版2 (高清水城跡5次・6次)

1 5次調査 SD03断面（東から）



2 5次調査 SB13とSD05断面（東から）



3 5次調査 SD06断面（南から）



4 6次調査A区 SA11とSD01（西から）



5 6次調査 A区 SD01と土塁（東から）



6 6次調査 B区 SD01（東から）



7 6次調査 B区 SD01断面（東から）

写真図版3 (高清水城跡 6次)

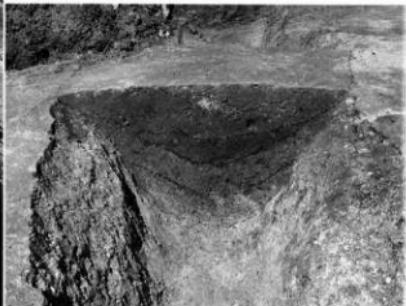


1 6次調査 C区完掘状況（南から）

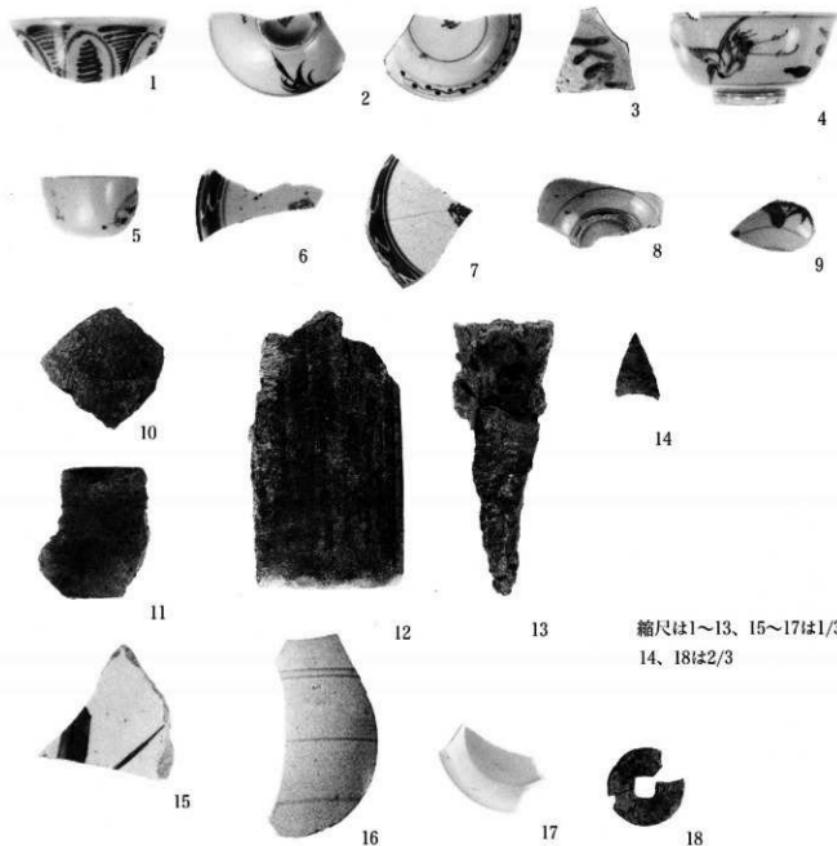


左 2 6次調査 C区完掘状況（北から）

下 3 6次調査 S D04断面（南から）



4 6次調査 D区完掘状況（北から）



縮尺は1~13、15~17は1/3
14、18は2/3

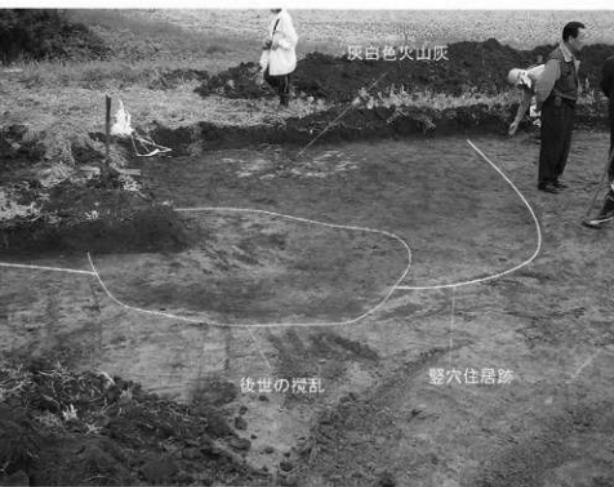
No.	種別	地 標	調査次数	出土層位	性 型	特 徴	生 産 地
1	近世磁器	飯碗	5次調査	S D04堆積土	口径(10.8cm) 残存高(3.9cm)	コバルト呉須	19世紀後半
2	近世磁器	飯碗蓋	5次調査	S D04堆積土	径9.2cm 高さ3.2cm		瀬戸19世紀代
3	近世磁器	皿	5次調査	S E02堆積土	直径(4.8cm) 残存高(1.85cm)	高台に砂	肥前 17世紀か
4	近世磁器	飯碗	5次調査	表土	口径11.6cm 残高5.6cm		瀬戸 19世紀代
5	近世磁器	茶碗	5次調査	表土	口径(7.2cm)		不明
6	近世磁器	中皿	5次調査	表土	径13.8cm 高さ2.6cm	墨押き 五弁花	肥前
7	近世磁器	中皿	5次調査	表土	底径(8cm) 残存高(1.85cm)	墨押き 五弁花	肥前
8	近世磁器	茶碗	5次調査	表土	破片		切込焼?
9	近世磁器	茶碗	5次調査	表土	破片		切込焼?
10	中世陶器	甕	5次調査	表土	破片		常滑
11	瓦質土器	火鉢	5次調査	表土	破片		不明
12	瓦	瓦	5次調査	表土	破片		不明
13	鉄製品	石突	5次調査	表土	長さ17cm 幅7.1cm	木質漆残る	不明
14	石器	石礫	5次調査	表土	長さ2.1cm 幅1.35cm 重さ0.7g	石材:頁岩	不明
15	近世磁器	大皿	6次調査	遺構確認	底径15.8cm		肥前
16	近世磁器	納利	6次調査	遺構確認	破片		切込焼?
17	近世磁器	角皿	6次調査	遺構確認	径4.8cm 底径4.7cm 器高1.7cm	型成形	瀬戸か
18	古鏡	南宋鏡	6次調査	S D04堆積土	径2.31cm 重さ0.8g	「鑑定元寶」(1260)	

写真図版4 (高清水城跡5次・6次調査 出土遺物)

写真図版5 (佐野遺跡)



1 東区 遠景（南から）



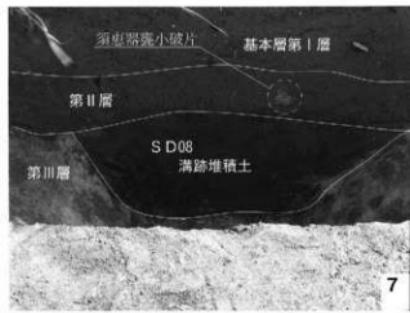
2 東区 竪穴住居跡検出状況
(西から)



3 東区 竪穴住居跡
灰白色火山灰堆積状況
(北から)

写真図版6 (佐野遺跡)

- 1 西区 東半部 (東から)
- 2 西区 トレンチ2 ピット (北西から)
- 3 西区 トレンチ3 (南東から)
- 4 西区 トレンチ4 (西から)
- 5 西区 トレンチ5 (北西から)
- 6 西区 トレンチ6 (北東から)
- 7 西区 トレンチ6 溝跡詳細 (西から)



報告書抄録

ふりがな	たかしみずじょうあと・さのいせき					
書名	高清水城跡・佐野遺跡					
附書名						
巻次						
シリーズ名	高清水町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第4集					
編著者名	大和幸生・白崎恵介					
編集機関	宮城県教育委員会					
所在地	宮城県仙台市青葉区木町3-8-1 電話 022-211-3682					
発行年月日	2005年3月15日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	位置	調査期間	調査面積	調査原因
高清水城跡	宮城県栗原郡 高清水町 字東館	45241	44024 北緯40分00秒 東経141度00分00秒	20040607～ 20040611	約400m ²	国保診療所改築に伴う確認調査及び付設駐車場歩道建設に伴う確認・事前調査
高清水城跡	宮城県栗原郡 高清水町 字東館	45241	44024 北緯40分00秒 東経141度00分00秒	200408023～ 20040830	約250m ²	町道東小路線拡幅工事に伴う事前調査
佐野遺跡	宮城県栗原郡 高清水町 字佐野丁	45241	44044 北緯39分25秒 東経141度1分13秒	20040929	約180m ²	無線基地局鉄塔建設に伴う確認調査
佐野遺跡	宮城県栗原郡 高清水町 字佐野丁	45241	44044 北緯39分25秒 東経141度1分13秒	20041124	約400m ²	町道改良に伴う確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
高清水城跡	城館	中世～近世	掘立柱建物跡5棟 柱列跡1列 溝跡4条 井戸跡1基 土壙	磁器・陶器・中世 陶器・土師器 鉄製品(石突)・石 築	東西10間幅の屋敷地の一部と「下中層敷」地の地割りの一部を検出	
高清水城跡	城館	中世～近世	柱列1列 溝跡4条 井戸跡1基 土壙7基	磁器・陶器・須恵器・古銭	上墨北の区画溝 北側埋跡の検出	
佐野遺跡	集落	古代	竪穴住居跡1軒	土師器壺・甕	灰白色火山灰が堆積	
佐野遺跡	集落	古代	溝跡7条	須恵器壺	溝跡については年代不詳	

高清水町文化財調査報告書第4集
高清水城跡・佐野遺跡

平成17年3月10日印刷

平成17年3月15日発行

発行 高清水町教育委員会
〒987-2133 東原郡高清水町字桜丁5
電話 0228-58-2204

印刷 今野印刷株式会社
〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10

